

〔緒 言〕

地域における大学の“本当の”役割

山 田 信 一
(経済学部長)

昔から大学は地域にとって重要な役割を果たしてきた。本学は北九州の地に立脚し、国際社会に通用する経済人、企業経営や地域社会に貢献しうる実務家の養成を建学の理念として掲げている。経済学部もこのような理念にそって多くの人材を育成し、地域社会に送り出してきたことはいうまでもない。しかし最近、大学に求められる役割は広がりを見せている。たとえば多くの大学で地域貢献が課題として掲げられ、教員や学生が商店街活性化などの地域活動に参加したり調査に汗を流している。さらに大学が地元の地方自治体や銀行と包括的な協定を結んだりする動きも珍しくなく、大学に期待される役割も非常に幅広いものとなってきた。

私なりに最近行われている大学の地域貢献を調べてみると、教員や学生が地元地域のために様々な活動をする実践的な活動はかなり行われていることがわかった。ところが本来大学は、学問的知見にもとづき広く社会のあり方を問う、そのような役割を担っている。すなわち大学が本来行うべき地域貢献とは、地域のあり方について大局的な方向性を提示することなのである。しかしこの点が現状の地域貢献ではかならずしも十分に行われていないのではないのか。そこで経済学部として、近年北九州市が追求している研究開発やイノベーションに強味を持つ学研都市をどのように構築したらよいのかという、地域の方向性を指し示す知見を提示しようということになった。

そのために企画されたのがFUTURA主催の「学研都市のシステムデザインと北九州地域の今後」という国際シンポジウムである。シンポジウムは経営学科の若手教員が中心となり企画立案し、海外からの招待研究者、北九州市の実務担当者も含め多彩な方々をパネリストに迎え行った。そして最近成功事例として注目されている台湾のサイエンス・パークを「意図的にデザインされた一つのシステム」として把握し、北九州市の事例と対比しつつ、学研都市として成功するためにはどのような要件が必要なのか、析出することを課題とした。産業構造転換を実現するために進められている北九州学研都市プロジェクトに関して、有益な知見がえられるかもしれないと考えたからである。

なお台湾を含め遠方からお越しいただいたパネリストには、貴重な報告やコメントを、また北九州市産学連携センター産学連携課長（当時）徳永篤司氏には北九州学研都市の取組について貴重な報告をいただいた。報告内容や当日行われた議論については後掲の記事を参照いただきたい。この国際シンポジウムが本学部の「地域貢献」として何らかのお役に立つならば望外の幸いである。最後に、パネリストの方々をはじめ、当日国際シンポジウムに参加いただいた多くの方々に御礼申し上げます。

